

◆水明インターネット句会◆

令和六年三月

(1)

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	大原の坂の二軒目花山葵	マシユマロの適量知らず春の泥	

弊社には日永は遂に訪れず
猫の子よ今日より此処が君の家
返事して立つ卒業の弟（おとど）かな
草青む野に還りたる捨田かな
鳩独り地虫出でたか啄めり
好きな子に恋人をりぬ椿落つ
在りし日の話題尽き無し春座敷

紅梅の千年のいろ肩車
鶴守の視線の先に鶴引けり
春まけて過去を予習す学生よ
鳩守の視線の先に鶴引けり
母といて幸せを摘むたら芽かな
初蝶や九段坂下レストラン
春月や黄身をつぶして卵吸ふ
障子あけ雛に見せてる雪景色
妻しのぶ長き睫毛の女雛かな
ふるさとの母と眺めしひな祭り
重畠として早緑の山笑ふ

◆水明インターネット句会◆

令和六年三月

(2)

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21					

◆水明インターネット句会◆

令和六年三月

(3)

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41						
認知症検査合格夫の春	卒業も第二ボタンの旅立てず	顛末も一語にすれば春の雪	明けの湖白鳥ひと声旅立ちぬ	しおり抜き雨月の語り余寒かな	春疾風砂触りする古書を買い	良く知恵の廻ることどもや風車	彼岸まで続く寒さに落ち着かず	珈琲を入れて寝落ちや春日向	ふれてみる雨の重さの花馬酔木	風光るもひとつ歩くバス区間	春立つやブアオンとバイクひと吹かし	春の日の福は横丁伊勢うどん	菜の花や駆けゆく白のスニーカー	流氷の押し合ひ圧し合ひ叫ぶ声	風光る小川に遊ぶ足白し	風光る都電一日乗車	幼げな卒業袴二尺袖	青空に制帽を投げ卒業す	鍬入らば匂ひ返すや春の土						

◆水明インターにて句会◆

令和六年三月

(4)

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61					

◆水明インター ネット句会◆

令和六年三月

(5)

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
ものの芽のほぐるる気配今朝の雨 情念の色を湛ふる紅椿	じやうじやうと焼蛤の叫びかな 歩く場もなき六畳間雛納め	春耕の八分がお茶で二分が鍬	うららけし偵察蜂の家探し	ウインクの男近づく顰ぐもり	身悶えし白魚哀し滾る釜	牡丹雪季節移ろう諷訪の風	北を指し引鴨の陣搖るがざる	トラクターのタイヤのはざま蓬萌ゆ	牧開き十勝は空を解き放ち	空き缶のカラコロカラと春一番	サイホンの滴りを待つ春うらら	草餅を食べるひ孫や膝の上	凍て反る最終電車去るホーム	猫の子を家族に迎へ写真撮る	三男の就職祝ふ花見かな	春疾風帽子も我も走るなり	しゃかりきに蒲公英咲くや記念の日		

◆水明インターネット句会◆

令和六年三月

(6)

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101
吟行や靴にたつぶり春の泥 お地蔵様の耳は福耳日永かな	春曇りめまい覚えし窓越しに 花街の町家格子や朧月	ほどけゆく紅茶葉窓に牡丹雪	永き日のエレベーターはよくしゃべり	何となく家族集まる春炬燵	噛んで食ふけんちんそばや春浅し	花冷えや鳥の骸を葬りけり	零れ種庭の周りの菜の花よ	カプチーノの泡見つめをり春憂ひ	回転ドア開くれば花の鼈	崩れたる土砂へふんはり春の雪	春雪や上野十八番ホームを偲ぶ	風立ちて芽柳搖るる銀座かな	濃紺のスースの折り目風光る	口ずさむなつかし校歌巣立つ子と	生かされて今日の佳き日に鳥帰る	漱石は生まれかはりて犬ふぐり	主亡くて古りし絵屏風向うむき		

◆水明インターねつト句会◆
令和六年三月

令和六年三月

乙女らの微笑みの色花と化す

老梅の名残の花や清々し

足下に空のかけらのイヌフグリ

ししめしる五臓六腑にしみれたる

卷六

賀川、伊藤、大庭、久松、佐々木

忍知症検査令各失の春

春雨や相合傘を躊躇は

揚雲雀そこからガザが見えますか

屏風絵の山よりきこゆ春の声

春炬燵足を伸ばせば想が湧き

卷之三

(7)